

---

# チクタクロックが殺しに来る

うい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チクタクロックが殺しに来る

### 【Nコード】

N9954Z

### 【作者名】

うい

### 【あらすじ】

――あの日、僕は大好きな彼女を見殺しにしました。

主人公、拓哉は過去のトラウマにより、女の子をどうしても愛することが出来なくなっていた。

久しぶりの休み、幼なじみの峰倉花が、チクタクロックという美少女の噂話を話した。

その時は、さほど興味もないので聞き流していたのだが――。

一変した日常の中、過去の罪とチクタクロックは、死んだ彼女の真相を暴いていく。

ブローグ・僕は許されざる罪人です

チクタク、チクタク。

古びた時計が時を刻む。昔っから変わらず、針は回る。

その時計を見ていると、隣に真っ赤な服の女の子が現れた。

彼女は言う。

「今は西暦何年だ？」

おかしいことを聞くもんだ。

今は、西暦20xx年だ。

「そうか。ありがとう」

途端に、彼女はその場から消えた。

幻のようだった。いや、幻だったのかもしれない。

そこには彼女がいた痕跡はなく、緩やかに時を刻む時計の音だけが聞こえるだけ。

彼女は、チクタクと時を刻む時計であり、その時計は秒を進めるだけで針の音が地を揺らす。

そう、彼女が、チクタクロック。

……。

この東出高校には、とある噂話がある。

それは、謎の美少女が突然現れるらしい、といういわゆる怪談の類なのか判別しにくい物だ。

なんでも、その美少女は自分のことをチクタクロックと名乗っているとか。

服装もこの学校の制服ではなく、体中を覆う真っ赤なマントに、真っ赤なテンガロンハットをかぶっていて、魔法使いにも見えるらしい。

「でね、チクタクロックは」

喜々として話す彼女、みねくらのはな峰倉花は、僕の幼なじみだ。

今日は久しぶりに二人の時間が空いたということで、近くのジャンクフードの店で談笑している。

そろそろ、一方的に語られるのもツラくなってきて、次は僕から話を切り出した。

「結局、それは七不思議みたいな物なのかい？」

「……なんか違うのよね、他の七不思議なんかとは。別次元、っていうのかしら」

「別次元？」

「うん。チクタクロックは、世界からはみ出した杭を叩くのが仕事らしいの」

「それを、チクタクロックが言ってた？」

「知らないわよ。ただの噂なんだから」

一応彼女とは同じ高校なのだが、チクタクロックなんていうのは初めて聞いた。

そもそも、僕は人と話すことを疎む性格だから仕方ないのだが、世界からはみ出した杭。出来過ぎた天才か、それとも世界侵略なんか考える独裁者か。

どちらにしても、あまり僕とは関係はなさそうだ。

面白そうにしていない僕の顔を見て、峰倉は頬を膨らませた。

「やっぱり、拓哉に話すんじゃないかった」

「おいおい、聞かせといてそりやないだろう」

「聞かせてあげたんです。全然周りのこと知らない拓哉のことだから、知ったら良いリアクションしてくれると思っただけだなあ」

「何年も一緒にいたら、僕がそういう質<sup>たち</sup>じゃないことは分かるだろう」

「あー、無駄な時間使ったあ」

そう言つて、峰倉はカップに刺さったストローに口をつけ、窓の外を見ながら飲み始めた。

一度怒ると、もう話を聞いてくれないのは昔から変わらない。仕方なく、僕は持っていたハンバーガーにかぶりつく。

「あー!!」

突然の大声に、僕は飲み込もうとしていたハンバーガーを喉に詰まらせた。

「ゲホッ、ゲホッ」

咳こみながら、ハンバーガーを流しこむために手元のジュースを一気に飲み干す。

ようやく楽になってきた頃、一言文句を付けようと顔を上げると、峰倉は窓の外を見つめたまま固まっていた。

ただどすぐに彼女は体を震わせ、爛々と輝かせた瞳でこちらを見た。

「ねえ、修くんよ、修くん!」

僕と窓を交互に見て、峰倉はキヤーキヤー騒いでいる。  
仕方なく窓の外に目を向ける。

「あー、修……ね」

そこには、たくさんの女の子に囲まれる顔立ちの良い好青年が立っていた。手足はがっちりとしているのに、顔は小さくて整っている。体育会系の体つきにホストみたいな顔のくせに違和感はなく、むしろプラスに働いているくらいだ。

顔面にびつちりと貼り付けられた、アイドルがファンへ送る愛想笑いみたいな笑顔をする修を見て、僕は顔をしかめた。

なぜかは知らないが、あの笑顔が妙に気に入らない。

あれは何か隠しているようで、内に秘めた物を出さないように踏ん張っている笑みだ。

「拓哉、妬いてんの？」

峰倉が言った。

「なにが？」

「修くんを、まるで目の仇みたいに睨んでるから」

言われて気づく。

僕の眉間にはシワが寄り、口はへ字に曲がっていた。客観的に見れば、修に嫉妬しているようにしか見えない。

すぐさま無表情に戻して、首を傾げてみせる。

「そうかな？」

「そうよ。拓哉は、顔がそこそ良いんだから彼女ぐらいいいそうだけだなあ」

「じゃあ峰倉がなってみるかいい？」

「あー、止めて。友達のままの方が気楽よ。恋愛感情も無いし」

峰倉は腕を振って否定した。

片眉を下げて、困った顔をしてみせる。

僕も、彼女に恋愛感情は無い。家族のようであって、それ以上の気持ちになったことはなかった。

高校に上がってから、それは変わらない。

周りからは付き合ってるんじゃないかと囃されるが、それにも当たり障りのない返事をしていた。

彼女なんていらぬ。僕には、女の子との関係なんか、必要ない。あの日を繰り返すだけだ。

「ちょっと、修くんを追いかけてみようよ」

「お、おいおい。恥ずかしいからやめてくれよ」

「ちょっとだけよ、ねえ？ いいでしょ」

峰倉が僕の腕を掴んで懇願してくるが、

「悪いけど、一人で行ってくれ。僕は追っかけになるほど暇じゃないんだ」

と言い、腕をはじいた。

素っ気なくされた峰倉は頬をまん丸に膨らませて、目を釣り上げる。

「なら、いいわよ！ あたしも、別にそこまで好きでもないし！」

声を荒げる峰倉に、僕は頬杖をついて言う。

「さっきまではしゃいでたのは、どこのどいつだよ……」

膨れっ面を呆れ顔で見つめながら、僕はため息を吐いた。

月曜日、朝のホームルームの終わりを告げるチャイムが鳴った。  
クラスみんなは、授業の準備もせずに友達と立ち歩いたり、話をしている。

教室の隅っこ、窓際の席にいる僕は、体育の授業で校庭に集まってくる上級生を、ぼおつと眺めていた。

遠くから見ると、あれってアリみたいだ。黒い粒がちよろちよろ動き、そのあとを追うように、他のアリがついて行く。

風がカーテンをなびかせた。

同時に、僕に声かけられる。

「今日は、ずいぶんらしくないね」

声のする方を向くと、同級生の水無月琴葉みなづきことばだった。

この学校で、僕の数少ない友人の一人であり、性同一性障害者である。

彼は男だ。しかし、顔立ちから何まで女にしか見えない。声も中性的で、男だと教えられなければ、まず分からないだろう。

「昨日、何かあったの？」

男とはこれっぽっちも思えない、柔らかな音を喉から響かせる彼に、僕は首をどちらに振ろうか迷った。

修の、あの憎たらしい笑顔を見たからなのか、否か。

堂々巡りしている頭を振って、首を縦に落とす。



「なんでもないよ。気分が悪いだけ」

「そう？ 私で良かったら、悩み事でもなんでも気軽に言ってね」  
「ああ、ありがと」

肩まである髪を翻して、琴葉は去っていった。

そういえば、彼にはまだ教えてもらっていないことがあった。

彼は、生まれつきの性同一性障害ではないらしい。

幼い時に、生涯のトラウマになるレベルの事件があった、ということだけを琴葉の母親から聞かされていた。

だから、変な子でも仲良くしてやってね、だと。

僕は、アイツがそういう人間だとしても、嫌いにはならない。たかが性別を間違えてしまっただけに過ぎないからだ。

僕だって、女の子に産まれてさえいれば、あんな思いもしなくて済んだのに。

彼女は、僕を好きだと言ってくれた。

その言葉に、僕も、と返した。

いつまでも続くはずだったんだ。ずっと、笑いあえる日々を送るはずだったんだ。

あの日、彼女が死んでしまい、そこにいた僕は、死にゆく彼女を黙って見ていた。

助けようともせず、誰かを呼ぼうともせず、声をかけることもせず。

彼女から溢れる出るおびただしい量の血に、僕はこの上ない恐怖を感じてしまっていたんだ。

息絶える寸前、彼女は僕の方へ、苦痛に歪んだ顔を向けた。

僕は醜くなった彼女の姿に、ビクンと体を強ばらせた。

その時の彼女の顔が忘れられない。

哀れむような、蔑むような、恨んでいるような。

その全てが僕に向けられたことが怖くて、悲しくて、そこから逃

げ出してしまった。

僕は卑怯者だ。

彼女のお葬式では涙一滴すら流れなかった。まだ、彼女のことを怖くてたまらなかったんだと思う。

流れるよ、流れてくれよ。

必死に目に力を入れるが、出てくれない。

遺族の人たちは、泣かないのは死を受け入れてないからだと言う。違うんだ。死を受け入れてしまったから泣けないんだ。怖いんだ。恨めしそうな顔をした彼女が、僕を呪いそう。

僕は罪人だ。許されない罪人なんだ。

唯一僕を許せる彼女は、もう僕の前にはいない。

昔の思い出にふけていると、一時限目の授業が終わった。

起立、という言葉で立ち上がり、礼、という言葉で席に座る。

首もとに汗が溢れていて、それを手で拭った。手を確認すると、玉になるほどの汗がべっとりと付いていた。

ハンカチで首を満遍なく拭いて、また窓の外を覗く。

青空のキャンパスに、白い雲が悠々と流れていく様は、つらい気持ち忘れさせてくれた。

チクタク、チクタク。

ふと、彼女がよく口ずさんでいた歌が聞こえた気がした。

## 第一話・思考と束縛

僕と彼女の関係は、僕と彼女と、その親しか知らない。もちろん、幼なじみの花も知らないはずだ。

別に知られても良かったのだが、秘密という心くすぐられる響きに、僕と彼女は魅了されていた。

週に一回、彼女の家で遊ぶ。

おままことや、テレビゲームや、トランプや。

彼女とは、色んな遊びをやり尽くした。

将来は結婚しようね、とか言い合ったりして、好きな気持ちをいつでも、どんな時でも表していた。

絵で、彼女との新婚生活を描いたり、老後を思い浮かべてみたり。

ああ、なんて素晴らしい未来予想図。

僕に彼女が微笑んでくれる。

それだけで、僕は毎日が幸せでした。

……。

狭い空間の中、栗色の髪をした女の子が心ここにあらず、という顔で椅子に座っていた。

「世界からはみ出した杭……か」

女の子――峰倉花は、いつもの彼女にしては珍しく、学校の図書館にいた。

考え事をするには、こういう静かな場所がうってつけらしいのだが、逆に静かすぎて、考えが四散しがちになってしまう。

「アイツが邪魔になるけど……」

頭で浮かべた言葉が口からボソボソと出てしまうのは、彼女の悪いクセだ。

「ようは……どうやって拓哉を誘き出すか……」

独り言を呟く峰倉は、明らかに不審者なのだが、図書館にいる誰もが彼女の奇行を気にしていない。

まず彼女のような人間も少なからず利用するため、ということが挙げられる。

もう一つ、図書館の隅っこの席にいるからだ。

そこは本棚が彼女の周りを囲っていて、あまりの狭さと閉塞感で息が詰まりそうになるはず。しかし彼女は、

「でも……口実が無いのよねえ」

どこを見ているかも分からない目をして、考え事を呟いているだけだった。

あまりに頭を使いすぎて、視界にまで意識が行っていないのだろう。

「しかし、もう時間はありません」

いきなり彼女の口から、はっきりとした声が発せられた。

つい出てしまった言葉ではない。むしろ、意識的に誰かに伝えるために発したようでもあった。

「分かっているとも」

彼女の背後に突然、細身の少女が現れた。

服装は、赤いマントに赤いテングロンハットを着込んでいた。

峰倉の背後には、高々と伸びる本棚があり、その左右にも同じくらしい本棚が立っている。

つまり、背後へとまわるならば彼女の目の前を通らなければならない。

しかし少女はどこを通ったわけでもなく、シーンを丸々切り取ったみたいに現れたのだ。

少女は峰倉の肩に、赤い袖から少しだけ出した、服とは対照的に真っ白い手を置いて、耳元で囁く。

「俗物が思考しなくてよい。お前はお前の任務を遂行しろ」

峰倉は、ハッ、と意識を取り戻した。  
慌てて辺りをキョロキョロと見回す。

「なにしてたのかしら……あたし」

すでに、あの少女は姿を消していた。  
現れた時と同じ、突然に。

「まず……なんか考え事しようとして、図書館に来たのよねえ……」

彼女は、まるで一連の会話を忘れてしまったように、顎に人差し指をあてて、思案顔をする。

それでも何も解決せずに、彼女は肩をすくめて、

「まっ、こういうこともあるわよね」

と言つて席を立ち、図書館から出て行く。

真つ赤な服の少女が立っていた場所に髪の毛が一本、ひらりと舞い落ちた。

教室に戻ると、クラス的女子達が固まって話をしていた。峰倉は「なにになに？」と会話の輪に入る。

すると、その中の一人の女子が眉間にシワを寄せて振り向いた

「あ、花か。あんた、前にチクタクロツクの話してくれたじゃん？」

「うん」

確かに、峰倉は以前この女の子たちにもチクタクロツクの話をしたことがある。

都市伝説の話題の時に、ポロツと口からついて出た程度なのだが、いつの間にか噂が肥大化してしまっていた。

やれ死神だとか。やれ魔法使いだとか。

もちろん、元々彼女が聞いた噂自体、デマなのかもしれないが。

「出たんだってさ、チクタクロツク」

「え!？」

これには、噂を流していた峰倉も驚いていた。

彼女自身、チクタクロツクはただの噂話にしかすぎないと高をくくっていたからだ。

女の子は、少しだけ声のトーンを落として話す。

「二組の女子が見たんだってさ。赤いマントに赤いテンガロンハットの少女が、人を殺しているのを」

「人を!？」

ちよつとばかり、噂と食い違っていた。

チクタクロツクは世界からはみ出した杭を叩くのが仕事。なのにどうして、人を襲っているのか。

疑問に思っているが、彼女はそれを言葉に出さないでいた。

「男の人をバラバラにしてたらしいよ？ 首を鉋でぶった斬って、血がブシャーって！」

「や、やめてよー！」

峰倉は自分の体を抱くように腕を伸ばし、女子を睨んだ。

彼女はアハハと、峰倉の怯える様子に対して、心底面白そうに笑う。

つられて峰倉も笑った。

「結局、チクタクロツクってなんなのかなあ？」

別の女子が言った。

最初こそ噂だけだったはずなのに、今ではチクタクロツクと名乗る少女が殺人を犯している。

わざわざ考えるまでもなく、単純に、噂に触発された愉快犯だろう。

当然、良い気はしなかった。

つまりその事件は、峰倉が面白がって噂を話していたために起きたかもしれないからだ。

「チクタクロツクの真っ赤な服って、全部血なんじゃない？」

「ちよつと……鳥肌立ったあ」

「でも、血って渴いたら茶色くなるんだよね？」

「アハハ、リアルう」

クラスメートがふざけて笑いあっている、峰倉は笑ってはいなかった。

俯いて、目を閉じて、いろいろ考えを巡らせていたのだ。

「……その手もあったか」

「ん？ 花、なんか言った？」

女子が話しかけてきて、峰倉はやつと顔を上げた。

「な、なんでもないよ！」

と言って、胸の前で両手を振った。

怪訝そうに見つめてくる女子達に、峰倉はなんだか居心地が悪くなり、

「じ、じゃあさ、真相を確かめに行かない！？」

思いつきで切り出した。

その言葉に、皆が笑顔になって頷きあう。

「いいね、行こうよ！」

「探偵みたい」

「犯人見つけちゃったりして」

ハシャぐ彼女たちを見ながら、峰倉は全身に汗をかいていた。

背中から首筋まで。ベッタリとシャツが肌に付着してきて、気持ちが悪い。

心臓もバクバクと鳴っていて、もしあのまま彼女たちに怪訝な顔



で見られていたら、心臓発作でも起きそうなほど脈打っている。  
なにかの拒絶反応のようだった。いや、体を通じての警告か。  
――これ以上、誰にも疑われるな。

峰倉の頭の中で、その言葉が何度も何度も忠告してくる。

（分かってる、分かってる……！）

制服の、胸の布をくしゃりと握り潰し、必死に冷静を保つ。

「じ、時間も無いし、次の休み時間に行こうよ」

「そうだね」

女子たちは、気分よく峰倉の意見に賛同してくれた。

心臓も、だんだんおさまってきた。

しかし、冷や汗は未だに流れ続けていて、背筋に悪寒は走るし、  
喉は痛くなるほど乾いている。

この異常な症状に、峰倉は疑問を抱かない。

（罰、罰、罰）

頭の中に流れた忠告のように、ひたすら“罰”と繰り返していた  
からだ。

彼女の思考は、また別のことに働いていた。

授業中、後ろの席から折り畳まれた小さな紙切れが渡された。  
パラッと開けてみると、文字が書かれている。

今日、午後七時に人を殺す。

明日、また噂を流す者が現れる。

その補助をしろ。

峰倉はそれを読み終えると、表情というものの一切を失った。焦点の合わない目を泳がせ、紙切れを自分のカバンに強引に突っ込む。

誰も……彼女の行動に気づいていない。

いや、気づかされない。

まるで、クラスの全員が操られているかのように、一人として彼女を見ず、ノートやルーズリーフに目を落とす、黒板に書かれたことを板書していた。

彼女は、その全員が一斉に目を逸らす隙を知<sup>……</sup>っていた。

「……了解」

峰倉が呟くと、周りからポツポツと話し声がし始めた。解凍され、息を吹き返したみたいに峰倉は慌てて板書する。

（なにポーっとしてたのかしら）

峰倉は紙の内容も、どこへしまったかも覚えてはいなかった。何の事はなく授業は進み、二時間目のチャイムが鳴った。いつもの挨拶をして席に座る。

ノートを机の中に押し込んでみると、チクタクロックについて話していた女子たちが峰倉に近寄ってきた。

「花、さっそくチクタクロックについて聞きに行こっか」  
「う、うん」

峰倉は言い出した手前、断るわけにはいかない。彼女は席を立って、女子たちと一緒に教室を出た。

後ろの席、つまり峰倉に紙切れを渡した男子――浅間京は、あさま きょう教  
室から出て行く彼女たちの後姿を見て、ニヤリと微笑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9954z/>

---

チクタクロックが殺しに来る

2012年1月1日21時46分発行